

「人の美しさ」

主任司祭代行 松本 巖

「私も美しく生きたい!」そう思ってフィリピン北ルソン山岳地方の旅を終えて先日、日本に帰ってきた。もう十数年続けている体験学習の旅。今年は大学牛を中心に6人で少数山岳民族の村に滞在した。電気もガスも水道もない家に泊まり、外のトイレを使い、簡素な食事をいただき、子どもたちと思いきり遊び、日本の青年たちも日に日にたくましくなっていた。日曜日にはめったに司祭がこないこの村の教会堂でイロカノ語と英語の混じったミサを捧げた。彼らに何と説教で語ればいいのか。豊かな国からきた金満生活をしている日本人が何を語れるのか、そう考えると苦しかった。口から出た言葉は、イエスの山上での説教だった。「幸いなるかな、貧しい人、幸いなるかな、平和を築こうとする人、幸いなるかな、正義に乾く人……。神様はあなた方の側にいます」厳しい環境の中、シンプルな生活をしている彼らの姿は美しかった。人の美しさとは何だろうか、と思った。

今回、高校三年生のS君を連れていった。長男である彼は4月から家族のために就労する。去年の秋に父親が脳梗塞で倒れ、「死なないで」という家族の祈りが奇跡的に聞き入れられ命は取り留めた。今は一人で歩き回れるほど回復したが、会話が成り立たない。起きている時は奇声を発している。脳の一部が壊れてしまったようだ。徘徊する認知症の老人の介護は厳しい。まして40代の彼の介護を奥さんがするとなれば、長男が働きにでなければ家族がなりたない。弟妹のために働くという、フィリピンでよくある現実をS君は日本で生きようとしていた。彼の決意に満ちた笑顔は美しかった。

人の美しさとはなんだろうか。それはたとえ過酷な現実の中にあっても自暴自棄にならず、希望をもってその現実を受け止めている人を私は美しいと思う。それは人生の不条理の中にあってもその意味を信じて、打ちひしがれている人を私は美しいと思う。シミも傷もない人生だから美しいのではなく、傷だらけであってそれを我が物と受け止めた人は美しいと思う。

この復活徹夜祭に洗礼を受ける希望者の面接が始まった。それぞれの人生を分かち合っている。紆余曲折、波乱万丈、支離滅裂。それぞれに人生がある。ほんとうに美しい人生だと感じる人がいる。私たちの信仰共同体は美しい人の集りだと思った。